

はじめに

本学は昨年度スーパーグローバル大学創生支援に申請し、採択された。申請にあたって本学が発表した国際化戦略の取り組みのうち、留学生の受け入れ計画は、2019年には現在の外国人留学生数の倍の1000名、2024年にはさらにその倍の2000名としている。どのような留学生がどのくらい増えていくかははっきりするのはこれからであるが、今後本学で日本語を学ぶ留学生が増えることは間違いのないであろう。

立教の日本語教育プログラムは一クラスあたりの定員を適正に保つことで、教員が学生一人一人の日本語の伸びをより細かに観察し、学習を促す条件を保っている。今後、留学生数が大幅に増えた場合でも、また留学生受け入れのパターンがさらに多様化した場合でも、現在の日本語教育プログラムが持つ良さを生かした工夫を行い、本学で日本語を学ぶ留学生たちが、立教で日本語を学んでよかった、と思えるよう努力を重ねていきたい。

今や日本語教育センターの12月の恒例行事として定着しつつある「日本語教育センターシンポジウム」は今回で第4回を迎えたが、今回は、「大学の国際化と日本語教育におけるプログラム評価－過去・現在・未来－」というテーマで企画した。上述のように日本語教育センターを取り巻く環境が時々刻々と変化する中で、本センターが本学の日本語教育をしっかりと担っていくための方策の一つとして、2013年度よりプログラム評価の活用に取り組んでおり、2014年度のシンポジウムではプログラム評価をテーマに取り上げた。その中から得た示唆は、開発型評価の活用で、シンポジウム後から開発型評価の活用に着手している。今回は、このテーマを継続して取り上げ、日本語教育におけるプログラム評価の過去、現在、未来を概観し、ディスカッションを行うことで、開発型評価の取り組みの意義や可能性について模索することを主眼に置いた。

シンポジウムは2部構成とし、第1部は、田丸淑子氏（元国際大学大学院国際関係学研究科教授）に「日本語教育のプログラム評価の過去について」という題目で、つづいて池田伸子氏に「大学の国際化の観点から期待する日本語教育センターのプログラム評価」という題目で、そして山口和範氏（副総長、国際化推進機構長、経営学部教授）に「大学の国際化の観点から期待する日本語教育センターのプログラム評価」という題目でお話いただいた。つづいて第2部の討

2 はじめに

論は、西原鈴子氏（国際交流基金日本語国際センター所長）、小澤伊久美氏（国際基督教大学日本語教育課程 課程准教授）、そして長尾真文氏（国連大学サステイナビリティ高等研究所客員教授 / プログラム・アドバイザー）からコメントを頂戴し、フロアを含めた全体討議を行った。

当日は、学内の教職員をはじめ、学生、学外の方々に、50名強の参加があった。当日の参加者アンケートからは形式的、表面的でない意見ややりとりが高く評価され、また、本センターの取り組みにも関心を寄せていただいた。充実した講演内容とともに、活発に議論が交わされた全体討議の詳細もぜひお読みいただきたい。

最後に、今回のシンポジウムでご登壇くださった田丸淑子先生、西原鈴子先生、長尾真文先生、小澤伊久美先生、山口和範先生、池田伸子先生、挨拶を賜った白石典義先生、長谷川修一先生、そして当日ご参加くださった皆様に厚くお礼申し上げます。また、企画・準備段階から本報告書をまとめるまでご尽力くださった日本語教育センターの皆様にご心から感謝の意を表したい。

日本語教育センター長 / 異文化コミュニケーション学部教授

丸山 千歌